開港広場における都市デザイン

西脇敏夫　横浜市都市計画局 都市デザイン室

❶都心部のとり組み

横浜の都心部である関内地区には安政6年の開港以来、「ミナトマチヨコハマ」の歴史の中から多くの特徴のある街が生れ育ってきた。しかし関東大震災や戦災などによって、建物などの歴史的資産はそのほとんどを失っている。

今日、馬車道、伊勢佐木町、中華街、元町などの商店街は歩行者空間の整備を中心に新しい特徴と魅力をもった街づくりを展開しているし、山下公園や日本大通りを中心とした業務街も豊かな緑や残された数少い近代建築を生かした、落ち着いた街並の形成をめざした街づくりを推進している。昨年暮に完成した開港広場はこうした街づくりの一環である。

❷開港広場計画

開港広場付近は、日米和親条約の締結された地であり、開港以来、日本の表玄関であった場所である。今日では周辺に山下公園や大さん橋、県民ホールや国際会議場などの公共施設や市民利用施設が集積し、市内外から多くの人々が訪れる場所となっている。

昭和56年に旧英国領事館の建物を活用した横浜開港資料館が開館したのをきっかけに、隣接する道路交叉点の緑地再整備の話がもち上った。一方、外国客船の入港が少なくなった大さん橋を積極的に市民利用してもらうための方策検討がはじめられていた。この2つの動きを合体し、ミナトヨコハマの新しいシンボルゾーンとして再整備するために関係局によるプロジェクトチームを編成し検討を開始した。

大さん橋通りの歩道を拡幅するとともに、交叉点における車の交叉をロータリー方式から十字路型に単純化する。それによって山下公園方面へ向う時に大きく迂回させられていた歩行者ルートが改善でき、新たに歩行者用の広場を生み出すことができる。関係局間の調整を重ねこの基本計画が決定された。

関係局の数は最終的には7局区になった。そしてさらにこの広場計画のデザインには多くの関係者の参加と協力が必要であった。建設省、県警察本部、東京電力、電々公社等である。またこの広場整備とたまたま時を同じくして、隣接する海岸教会と港湾合同庁舎の外装材の塗り替えが行われた。周辺一帯の建物は、街のベース

カラーとして茶系統の色を採用するよう、建設時に協力をあおいでいる。白かった港湾合同庁舎をベージュ色に、海岸教会はその位置、形態、歴史性からシンボル的扱いとして反対にベージュ色から白色にすることを各々にお願いし、実現することができた。

❸歴史性と国際性の表現

具体的な設計は大さん橋プロムナードの事業年度が広場事業より1年早く行われることが決定されていたために、歩道の舗装材と照明灯を共通のものとすることにし、その調整を先行した。舗装材は港のふ頭に昔から敷きつめられているみかげ石を、照明灯は日本では横浜に最初に点火されたガス灯をモチーフにすることとした。開港資料館に設置されていた照明灯が、昔大さん橋に設置されていた器具をイメージさせるので、これを街頭用にデフォルメして採用した。

広場全体のデザインは横浜の歴史性と国際性を表現するものとし、①海岸教会、開港資料館、シルクセンターなどの周辺の建物を生かす。②特に大さん橋からランドマークとなる海岸教会への軸線を中心にデザインを展開する。また③横浜の友好姉妹都市と姉妹港の方角と位置が解るような表示をする。④緑地の片隅にあった「日米和親条約締結の地」の碑を目立つ場所に設置する。⑤基調となる素材は舗装のみかげ石と高木を中心にした緑、それに池など水を効果的に配することなどを基本的な方針とした。

そして、設計作業を高橋志保彦氏に依頼し、サークルミラーや石による波模様などのアイデアが付加され、最終的なかたちにまとめられていった。

工事着工後に発掘された明治時代の煉瓦造の下水管と人孔は、日本の近代下水道のはじまりを示す歴史資産として貴重なものであるために、現地にそのまま保存することとし、同時に市民が常時見学できるように工夫した。工事着工後の発見であったために広場のデザインに極力影響を与えないように配慮した方法が考えられた。

❹街は生きもの

開港広場は横浜都市デザインの都心部でのとり組みの一つの例である。この広場の誕生はこの地域の空間に新しい緊張関係をつくり出し、さらにその影響は周辺に拡がっていく。

街を構成する施設と主体は多種多様である。各々に立場や事情を背負って街に参加しており、そうした一つ一つの集積が街になる。一つ一つの動きが街全体のバランス関係に多かれ少かれ影響を与えることになる。現代の街は常にその姿を変える生きもののようなものである。個性と魅力のある街はその動きに応じ、全体としての特徴を生む空間秩序をもち続けることが必要である。そのため街のデザインは、形態的な美しさを固定的なものとする静的なイメージで把えていくことはふさわしくない。

街は生き続ける。広場の完成は街づくりの完成ではない。街づくりの一つの節にしかすぎない。生きている街を相手に、常に、個性と魅力ある地域空間を求め、創り続ける行為、それが都市デザインである。